
俺とところてんのリリカル世界冒険譚

鷹売りのタカさん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺とところてんのリリカル世界冒険譚

【Nコード】

N4941BA

【作者名】

鷹売りのタカさん

【あらすじ】

そこには「プルンッ」がいた。それしか表現できそうにない。とても透明な物体だ。その物体は今自分の前に立っている。ただただその物体は「プルンッ」としている。その物体そのものが「プルンッ」であり「プルンッ」そのものが生命を持っている。そう、紛れもない「プルンッ」がそこにあった。

（前書き）

楽しんでいただけたら幸いです。

ポーボボを知らない人には少し分かりにくいかもしれませんが。

一つの魂が天に召される。

若い青年だった。大学受験に合格し、これからの憧れのキャンパスライフを楽しみにしていたのに、無常にも現実には彼に死を与えた。

青年の名前は『天野助定』^{あまのすけさだ}。彼はこの名前を少し変と思いながらも、誇りに思っていた。

彼の友人達はこの名前を見て、面白がって『ジヨジヨ』なんて呼んでいた。しかし、少年には、両親や親友達しか知らないもう一つの隠されたあだ名があった。

それは後に語ることにしよう。

俺は・・・死んだのか・・・？

なんだよ全く・・・せつかく頑張つて大学にも受かったのによ・・・。

この仕打ちはあんまりだぜ・・・。

・・・しかし、ここはどこだ？

辺り一面真っ白だ。それ以外に何も無い。地平線の彼方まで白色が続いている。

ここはなんだろうか・・・俗に言う死後の世界と言うものだろうか・・・。

「おい！ 誰かいませんかー！ いたら返事してくださいー！」

真っ白な世界に俺の声が響く。返事はない。ということは、俺はこの空間に完全に一人と言うわけか・・・。

「そんなことはないぞ」

「何奴ツ!？」

唐突だった。いきなり俺の後ろから声が聞こえた。俺は咄嗟に振り向き、身構える。

そこには、この空間と同じ真っ白なローブを纏った老人がいた。

「……誰だい、あんた……」

「ワシか？　ワシはこの世界の管理人じゃよ。俗に言う神という奴じゃな」

「そうかい。じゃあ聞きたい。ここは何だ？　死後の世界なのか？」

「うーむ、一応そうじゃな。だが本来の死後の世界とは少し違うな。ここは転生のチャンスがある者のみが行き着く世界じゃよ」

「つまりここにいる俺は、あんたの言う転生のチャンスがあるってことか？」

「うむ」

「転生するのは仏教における輪廻転生のことか？」

「ちょっと違うな。君はパソコンや携帯電話で、二次創作小説というものを読んだことがあるかな？」

「少しだけなら。生前俺が気に入っていたアニメの二次創作小説を友人に勧められて読んだことはある。確かにあの作品も転生という言葉が使われていたな。もしかしてあんたの言う転生ってのはそれと同じか？」

「その通りじゃ、理解が早くて助かる」

「ということは、俺はなんらかのアニメの世界に転生させられるってことか？」

「その通り。君には『魔法少女リリカルなのは』というアニメの世界に転生してもらう」

「あー、なのはね……。確かに見たことはあるけど、アニメだけだからな……」

「別に問題はないじゃろ。お前はこれまでの人生の未来を何一つ知らずに生きてきたのじゃぞ。今更何を恐れる」

「・・・それもそうだな」

「うむ、では次じゃ。何か欲しい能力なんかはあるかな？」

「それはつまり、アニメや漫画のキャラの能力や容姿をもらえる、とかそういう事か？」

「そうじゃ。別の世界に転生した者達は、『無限の剣製』だとか『王の財宝』なんて能力を選択したものが多かったな」

「ああ、確かにアレは強いし便利だからな」

さて、俺はどうしようか・・・。

容姿だけは絶対に変えたくはない。他人のおこぼれに預かってるようで、酷く屈辱的だ。それに俺は両親からもらったこの身体や名前に誇りを持っている。これを変える事は我が生みの親に対する最大の侮辱。これは譲れない。

となると能力か・・・特に欲しいとは思わないな。勝手に決めてもらうか。

あ、そうだ。一つだけ欲しいものがあるな。

「よし決まった」

「ほう、何にするんじゃ？」

「能力はあんたが勝手に決めてくれ。そして、俺は相棒が欲しい」

「む？ 能力をワシが勝手に決めるのは構わんが、相棒と言うと・・・デバイスのことかな？」

「いや、そういうのじゃない。ホントに仲良く一生楽しくいられそうな相棒が欲しい」

俺が生前最も楽しかったことは、友人といつも馬鹿やって遊んでい
る事だった。だから俺は最高の相棒が欲しい。

一緒に馬鹿なことやって、笑って、そして共に泣ける様な最高の相
棒が。

そんなのは他人にもらうものではない、とも思っが、俺は新しい人生で前みたいな仲間を作る気がしない。

だから神に適当に俺に合いそうな奴を見繕ってもらっ。

「相棒か・・・良いじゃろっ。大体、君が新しい人生で5歳くらいの頃に、君の下に送ろっ。能力もそれと同じ時期に開花するようにしておく」

「ああ、感謝するよ」

「うむ、では早速送るぞ」

突然、浮遊感が俺を襲っ。下を見ると、この世界と対照的な黒色が広がっている。

とても不気味だが、これも試練と思えば何とか・・・いややっぱり無理怖い。

「うおおああああああ！！！！！！！」

俺は生前でも出したことのない程に大絶叫して、闇へと消えた。

*

「うーむ、それにしても相棒か……。どんな奴にするかな」

神は空中にモニターのような物を出して、それを操作する。

モニターには、ありとあらゆるアニメや漫画のキャラが写っていた。

「何かヒントは・・・そういえば奴の名前は『天野助定』じゃったな。この名前をヒントにしてみよう。この名前だと、ジョジョが一番思いつくのだが・・・ん？」

そして神は、この名前に隠されたもう一つのあだ名に気付いた。

「こりゃ面白いのう。こんな所にもう一つ名前が隠されておったわふむふむ、『天野助^{てんのすけ}』か・・・決まった、奴の相棒となる面白い奴と言えばアレしかないじゃろ。能力の方もあの作品から取っておこうか」

そして神はモニターを操作し、助定に与えるキャラと能力を表示する。

画面には、

相棒：『ところ天の助』

能力：『^{レッドマジック}真紅の手品真拳』及び『^{ブルーマジック}青藍の手品真拳』

と書かれていた。

*

助定は無事、転生に成功するが、産まれて5歳の誕生日の一週間前に、新たな世界での両親を失う。

助定の親権を奪いあう親戚達、なけなしの遺産を手に入れようとす
る、醜い欲望の参上を見ながら、助定は悲しみに暮れる。

結局助定は親戚達の誘いを全て断った。「一人で暮らしてやる」と
堂々と親戚達に宣言し、誰も待っていない家に帰る。

助定には希望があつた。

神に頼んだ相棒、5歳になったら自身の下にやってくる。そして今日はその前日。それだけが助定にとっての希望だった。

そして、夜中の11時50分。

助定は眠ることができず、リビングでソファーに座って、虚ろな目で天井を見上げていた。仮にもこの世界での新たな両親を失ったのだ。助定はこの一週間、まともに睡眠を取れていなかった。

時計の針の進む音だけがリビングに響く。時間は既に11時59分。そして日付が変わる10秒前。

5、4、3、2、1、0

軽快な音楽が時計から聞こえてくる。時計が12時を告げたのだ。

その時だ。ソファーに座っていた助定の目の前で、まばゆい光が放たれる。

助定はあまりの光に目を開けられない。

それは10秒も経つと、徐々に光が消えて行き。やがて光はなくな

った。

助定はそれを確認し、目を開ける。

誰かが自分の前に立っている。

助定はその人物をよく見て、驚愕した。

そこには「プルンッ」がいた。それしか表現できそうにない。とても透明な物体だ。その物体は今自分の前に立っている。

ただただその物体は「プルンッ」としている。その物体そのものが「プルンッ」であり「プルンッ」そのものが生命を持っている。

そう、紛れもない「プルンッ」がそこにあつた。

少年は問う。

「誰だよ、あんた」

「プルンッ」は答える。

「オレはところ天の助だ。神って奴にお前所に送られたんだよ。それにしても随分暗いな」

その物体、ところ天の助は台所に向かい、一際大きな皿を持つてくる。

そしてその皿を机の上に置き、天の助自身も机に登る」

「まあ、何があつたのかは知らないが、その感じじゃまとも話せそうにないな」

天の助はそう言いながら、机に置いた皿の上に寝転がる。そして、側に置いてある醤油を手に取り、蓋を開ける。

「やあ————食せ」
つちへ

醤油を自分に掛けながら、天の助は助定を見て言う。

助定は立ち上がり、食器棚から箸を取り出して、席に着き、天の助を食べ始める。

助定は、天の助を食べながら、何故か涙が出ていた。拭っても拭っても涙は溢れてくる。

その涙は何によるものかは分からない。

ただ、助定は思っていた一つの言葉を口に出した。

「不味い」

そして助定の涙を見ながら、天の助はある重大なことに気がついた。

——オレ食われとるがな

助定もまた、ある重大なことに気がついていた。

——ところてんは醤油よりポン酢の方がうまい

こうしてところてんと少年の生活が始まった。

そして、助定は戦いに巻き込まれていく。

「にゃ!?! どうして助定くんがここに!?!」

「あの子も、魔導師……？」

助定は封印されたジュエルシードに近づく。

そして・・・

レッドマジック
真紅の手品真拳奥義「布の魔術」

助定の出した布を被り、布が取られると、そこには何もなかった。

「なッ！？ ジュエルシードが、消された？」

「一体……どうやって……」

「あーら不思議、ジュエルシードが消えちゃった。ククク、種も仕掛けもございません」

天の助は新たな拠点を見つける。

「今日は寒いな。皆もずっと出かけとって寒いやろっし、今夜は鍋やなっ！」

ロストロギア『闇の書』の効果によって、足を動かすことができない少女、八神はやては、新しくできた家族のために一人で車椅子に乗ってスーパーに行っていた。

「え」と、後は豆腐、豆腐・・・あった」

はやては豆腐に手を伸ばす。その時、横から視線を感じて、そちらを見る。

そこには「プルンツ」がいた。それしか表現できそうにない。とても透明な物体だ。その物体は今はやての近くのところてんコーナーの上にい鎮座している。

ただただその物体は「プルンツ」としている。その物体そのものが「プルンツ」であり「プルンツ」そのものが生命を持っている。

そう、紛れもない「プルンツ」がそこにあった。

そしてその「プルンッ」こと天の助は、はやてを凝視している。やがてそれは口を開いた。

「お嬢ちゃん、今夜鍋？」

「は、はい・・・そうですね・・・」

「ところでん買わない？　今なら2000円のところ1000円だけど」

「い、いや結構です・・・私はこの豆腐買って帰るんで・・・」

はやては豆腐を手に取り、早急に立ち去ろうとする。だが天の助に回り込まれてしまう。

「なあ買ってよ〜、ところでん買ってよ〜」

「え、ちょ、なんやこのところでん!？」

「なあ買っていけよ〜、ところで買ってい——」

「何やってんだテメー！！！！」

「ゴパアッ！！！！」

助定に殴り飛ばされ、宙を舞う天の助。

そして、二人友情は全ての悪を打ち砕く。

「やるぞ天の助！ 俺達の友情の技を！！！！」

「え？ 何それ？」

「ハアアアア・・・！！！」

天の助の後ろに回り、拳に力を込める。

「え？ ちょっと何だよ。 ってか動けないんですけど！？ バイン
ド！？」

「行くぞ、合体奥義『ところてんマグナム』！！！！！」

「グハアッ！！！」

助定の全力のパンチによって放たれる天の助の胴体部分。

これは、一人の少年と、一つのところてんの友情の物語である・・・

（後書き）

現在連載中の『魔法少女と愛国者』の話を考えている時に唐突に思いついたので投稿しました。

一応予告編という形ではありますが、本当に連載するかどうかは分かりません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4941ba/>

俺とところてんのリリカル世界冒険譚

2012年1月13日19時51分発行